

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第二回

著者 中川由香

今回は戊辰戦争の圭介と会津について述べます。

慶応四年四月、圭介は西洋の最新技術で自ら育てた伝習隊を率い、江戸を脱走。翌年五月に箱館で降伏するまで、会津と共に新政府軍と戦います。最初は宇都宮で会津藩主松平容保より酒肴を送られ激励されました。しかしその頃、会津は新政府へ恭順か徹底抗戦かで方針は未定でした。圭介が宇都宮を撤退し六方沢（霧降高原）の峻険な山中を飢えながら越え会津領に辿り着いた時、入領を拒否され、敗兵を率いた圭介は途方に暮れたこともありました。

旧来の武士道にこだわる会津の武将達と合理主義の圭介の間には、大きな軋轢もありました。彼らと共に会津の入り口の今市で複数回の戦闘を新政府軍と行い、土佐の板垣退助らの隊に敗北しました。圭介の部下浅田麟之輔は「自分達の軍費や兵糧は会津に頼っていたので、我々の指揮が及ばせなかつた。これは流浪の隊の真に嘆息する所だ。後世、みだりに拙策と言うべきではない」と述べています。また、当時、撤退時に村を焼き払う悪習がありました。圭介は、放火は絶対禁止と戒めていました。ある会津藩士が船生村を焼き払った時、圭介は農民を虐げたという咎で彼を免職しました。

一方、会津藩士の中でも圭介と苦楽を共にし信頼を培った人物もいました。柿沢勇記は、山本覚馬と

共に洋学を修めた優秀な人物でした。彼は江戸脱走時に圭介の参謀となりました。圭介は彼を赤子が母を頼る如く信頼し、死生を共にすると誓いました。しかし柿沢は、宇都宮で受けた銃創が元で日光で死亡。圭介は孤独に前述の六方沢を越えたのでした。

また、会津で圭介を迎えたのが、ロシア経験のある山川大蔵でした。彼は圭介を重んじました。圭介は山川を「性質は伶俐で君侯の鑑裁がある」と高く評価しました。山川は圭介を「大鳥殿は見かけは凄い人には見えないが、戦に破れたとき、山川君また負けたよと打ち笑って、その後おもむろに次の方針を決める。私はこの人がいたから負けてもすぐ士気を回復できた」と語っています。圭介は白河城の攻防中、山川と西側の日光口藤原に鉄壁の防御を敷きました。たった三百の兵を率い、当時最新鋭のアームストロング砲を携えた八百の新政府軍から守り抜きました。新政府は大鳥のいる日光口は難攻不落と、兵を白河に集中させました。ただこの藤原は女性もおらず食事は蛇や蛙を食べるなど粗末で、兵の不満が大きき、圭介は配下を宥めるのに苦労しました。

白河城が陥落し、圭介は会津から要請され、会津城への最後の守りの母成峠へ向かいました。圭介は兵が不足する中、農兵をかき集め八百の兵で二千の新政府軍から守ることになりました。この直前、圭

介に無断で伝習隊が勝手に山入村へ派遣されました。山入村では、仙台・会津・伝習隊の三部隊で戦いましたが、会津・仙台は退却してしまいます。残った伝習隊が殿で包囲されて戦い、多くの死者を出しました。会津・仙台の損害は軽微でした。会津はもはや頼みにならないと、伝習隊の不信と不満が爆発しました。その彼らを宥めて、母成峠の戦いに至ります。士気は崩壊、弾薬消耗、疲弊極まりない最悪の状況でした。圭介はここが敗れると会津が終わりになってしまうと兵を説得し、当時では斬新な縦深防御で三線の陣地構築をし、最善を尽くし戦いました。しかし味方の会津兵がまたもや撤退、勝手に陣地に火をつけました。後方が大混乱で、敵の大砲大量投入に苦しめられ、隊は散り散りになりました。圭介は最後まで陣地で、直接弾丸が雨あられと降り注ぐ中、撤退を指揮しました。なお、敵の砲兵を率いたのは薩摩の大山弥助、圭介の教え子でした。

この後も、圭介は檜原の原野を苦しい思いで流離い、敗残兵を纏め上げました。圭介は兵に死んだと思われ、伝習隊と再会した時出会えて夢のようだと言われ、男泣きしました。圭介は会津若松城攻防の最中も城を援護し、武器弾薬も無いままゲリラ戦で戦い続けました。そして米沢が新政府軍に降伏し、退路を絶たれて全滅しかねず、会津を離れる事を決断し仙台へ向かいました。海軍を率いて仙台にいた榎本武揚と再会したときは、もはやボロボロでようやく生きた心地でした。圭介ほど、会津人以外で会津の為に戦った人物はいなかったでしょう。